

開放的な教室で授業を受けているのは、LVMHジャパンの「ME」プロジェクトのもと学ぶ女性たち。MEは一度離職した女性に再就職に必要な学びを提供するプログラムだ。



# Women Never Stop Learning

## 私たちが学び続ける理由。

人生100年時代と言われる社会の中で、私たちはどうすれば自分らしく働き、柔軟に生きていくことができるだろう？ そのためのヒントを求めて、年齢やライフステージにとらわれることなく新たに学び、挑戦する人、そしてそれを支える企業や団体を取材した。

Photos: Mie Morimoto Text: Motoko Jitsukawa Editors: Maya Nago, Mina Oba

**母親や妻としてではない、自分自身を取り戻すために。**

新宿コクーンタワー50階。眩しい陽光が降り注ぐ室内では、12名の女性たちが東京モード学園の講師の指導のもと、パーソナルカラーについて学んでいた。和やかな雰囲気ながら、誰もが真剣な眼差しを講師に向けている。質疑応答も活発に交わされ熱量が高い。

彼女たちは20代から40代まで年齢や職歴など背景もさまざまだが、二つ共通点がある。ファッションやビューティー業界への復職希望者であること。そして、LVMHジャパンが日本教育財団の国際ファッション専門学校とモード学園とのパートナーシップのもとで実施する「ME (Métiers d'Excellence) LVMH JAPAN クライアント・アドバイザー・プログラム」に選ばれ参加している点だ。

MEは2014年にLVMHグループが創設した職業訓練プロジェクトで、世界中で1000名以上に学びの機会を提供している。アジアで初となるMEのロインチにあたり、LVMHジャパンのシ



この日の講義は、パーソナルカラーについて。顧客の肌や瞳の色、顔のつくり、雰囲気といった要素を分析し、似合う色を提案するための知識を身につける授業が行われていた。

# ME LVMH

## “離職していた15年間は空白ではなく、次のステップへの助走期間と思えるように”

の子育てに専念していた。だが昨年オンラインメディアでMEを知り、夫に背中を押してもらい思い切って応募した。「クラスで学んだことを店頭ですぐに実践できるので、知識や理論が身についているという手応えがあります」と語る彼女は、「15年間は空白期ではなく、次のステップへの助走期間だったと思えること」を目標に、修了後の復職を目指す。

また、商社でのブランドマネジメントなど順風満帆にキャリアを積んできた佐々木理沙(41)は、海外赴任となった夫に帯同するため4年前に退職。赴任先の上海で出産し、日本に帰国後は再就職活動に励んだが、子どもがまだ幼く時短勤務を希望すると、採用をためらわれたという。3年の採用と育児中のハンディを痛感し自信を失いかけていたときにこのプ



ME LVMHプロジェクト1期生の佐々木理沙(左)と増田久美子(右)。学校での授業と店舗研修からなるMEでの学びは、「新しい自分に生まれ変わるような感覚」(佐々木)。「働くことは自分を高める行為」と話す増田は、多様なバックグラウンドを持つ仲間とともに学ぶことで、互いに刺激し、吸収し合えるのもMEの魅力だという。

ロジェクトを知り、応募に踏み切った。「自分がどれだけ学ぶことに飢えていたか」と充実した表情で話す増田が、「再就職がうまくいかなかったときには自分を肯定できなかった」と振り返る。「今は母親や妻ではなく、一人の人間としての自分自身を急速に取り戻している実感があります」。ここで学んだ後の計画を聞くと、言葉を選びながら「子育てと両立しながら自分で納得のできる持続可能な働き方を模索したい」と答えた。

### 人口は増えても不安定な女性の労働状況

日本女性の就業人口は19年に3003万人と過去最高を記録し、いわゆるM字カーブ(結婚出産で離職することの多い20〜30代の就業人口が一時減少すること)も統計上は解消傾向にあると報告(総務省労働力調査)されたが、ウオワイエの指摘どおり、その労働状況は決して明るいものではない。女性就業者のうち非正規雇用で働く割合は48・5%で男性の3倍に上るだけでなく、正規雇用の職を一度離れると同じ条件での復職のハードルは高く、継続したキャリア形成が難しいのが実態だ。それに輪をかけるように、今回のコロナ禍が起こった。女性たちが置かれた労働形態の脆弱性が露呈され、その影響をもろに受けた飲食や販売などの業種に従事する割合が高い女性の失業率は、男性に比べて非常に高い。男女間の賃金格差もOECD加盟国中ワースト2の23・5%だ(2021年6月現在)。

ジェンダーや年齢の問題に加え、DX(デジタルトランスフォーメーション)が進んで雇用の需給にミスマッチが起きていることも、





新たな壁となって働く意志のある女性たちの前に立ち塞がる。少子高齢化が進む日本です。ますます重要な女性と高齢者の労働市場参加が政府も打ち出しているが、激変する労働や生活、社会の環境に追いついていないのが現状だ。

ATTSの使命です」  
OATSでは、デバイスやネットの基本的な使い方はもちろんのこと、経済、文化、社会問題、政治など、さまざまなテーマを学び、知見を仲間とシェアし、教え合い、さらに自分で学びを深められるようなプログラムを用意されている。英語が母国語でない人のために5カ国語で講座を展開しているのも特徴だ。カンバーは続ける。

そんな状況を打破するためのヒントを与えてくれるのが、IT黎明期の04年にアメリカで立ち上がった株式会社OATS (Older Adults Technology Services) による事業「シニア・プラネット」だ。「シニアのためのWeWork」とも評される同団体は、「新しいテクノロジーを活用することで、誰もがよりよい生活を送ることが出来る。特にシニアの生活の質はテクノロジーによって大きく向上する」という信念のもと、ニューヨークほか地域のコミュニティセンターを拠点に、シニア世代にIT教育を無料で提供している。創設者のトーマス・カンバー(54)はきっかけをこう語る。

「20年近く前、当時80代だったパールの使い方を教えることになり、その経験がOATS設立につながりました。パールはダンスが大好きで、自身の人生の最高潮期は75歳だと語るような女性。私は彼女から、テクノロジーを学ぶのは新たな言語を獲得するのと同じであること、わからないことを恥じる必要は全くないことなどを教わりました。今やライフラインとなったITからシニアを取り残さない、のではなく、年齢の壁を打破して、誰もが平等に支援される場所をつくること、それがOATSの使命です」

「新しい動きは日本でも興りつつある。「ふるさとみつけ塾」は楽しく学び、仲間をつくって学習意欲を継続させ、そこで得た知識や技能を実践の場で生かすプログラムを提供しようという趣旨で、19年に始まった事業だ。主宰するのは北海道十勝で食分野のマーケティングやコンサルティングなどを行う会社を経営する北村貴(53)と、人材マッチングサービスに携わった経験から、年齢を問わず自律的なセカンドキャリア形成をはかりたい人たちに支援する会社を起業した大桃綾子(年齢)の二人の女性だ。」

5カ月間のプログラムで構成されるふるさとみつけ塾のファーストステップは、学び直しリカレ

# Senior Planet

“税金から心身の健康まで、学び直しの社会的利益は、想像以上に大きいのです”



誰でも無料で受講でき、オンラインでの参加も可能。スキルの取得やキャリア構築だけでなく、コミュニティを形成することも狙いであるため、卒業後もシニアプラネットに通い続ける人も少なくない。

「OATS (Older Adults Technology Services) / シニア・プラネット」創設者のトーマス・カンバー。04年に設立し、NYやカリフォルニアなど、アメリカ国内6カ所に拠点を持つ。



「NT教育から始まる。学ぶ場所は15年にスタートした大人の学び舎『熱中小学校』。北海道から沖縄まで全国に19校ある学校の中から好きなところを選んで入学し、授業を受けることができる(以前は廃校となった各地の小学校を利用して対面授業が行われていたが、20年からはオンラインで実施)。教えるのは、投資家、IT企業のCEO、エンジニア、ミュージシャン、アーティストなど、現役の名だたる講師たち。皆、熱中小学校の理念に共感し、ボランティアで参加している。」

受講者には、選んだ学校がある地域に第二のふるさとの企業で学びを実践するためのインターンシップの機会が用意されている。

「日本社会は大人が失敗することをよしとしないけれど、現在のよううなコロナ禍では、たとえ失敗しても誰も気にしない。ふるさとみつけ塾に、「今こそ何かを始めるチャンス」と背中を押してもらったんです」

宮寺は現在、十勝の魅力を外郎だけでなく未来を担う地元若者や子どもたちにも伝えていく仕事に、大きな意義を見出している。北村はふるさとみつけ塾の真価をこう語る。

「ミドルシニア向け自律型セカンドキャリア支援プログラムと位置づけていますが、学び直しの目標

にしているのは、これまでの働き方や生き方の「棚卸し」です。働き方や場所がこうあるべきとか、年齢に見合った年収や役職といった思い込みを取り払ってもらう。企業名や役職がない自分に何が残るか、と問いかけると自信がない人が多い。学び直しによって次の一歩を踏み出すための自信を取り戻してもらいたい」

**どんなふうに取り組むのかは自分で決めていい。**

確かに、キャリアの軌道に一度乗ってしまったと、そこから外れるのは誰にとっても怖いことだ。しかし、だからといってそこにしがみついているのは、北村が言うように企業名や役職を失った自分に自信が持てず、棚卸しをすることもできないだろう。MEBプロジェクトが支援する女性たちは必ずしも自ら望んで棚卸しを行ったわけではなく、むしろ望んでいないが、その経験

があつたからこそキラキラした眼差しで学び直し、次なるキャリアに意欲を高めることができるのかもしれない。

世界最高齢のプログラマーとして注目を集め、熱中小学校でも講師をつとめる若宮正子(86)も、年齢に関係なく学び直し続けることの価値と意義を説く。だがその学びの姿勢は自由で軽やかだ。「大人はすぐに将来のためと子どもに勉強させようとはしますが、どんな仕事に将来性があるかなんて今の時代わかりません。だから役に立つか、社会に還元できるかなんて気にするよりも学びたいことを学ぶのが一番。面白い、知りたいな、と思ったらすぐに学んでみればいいのです。飽きたらやめればよいこと。やめたからって命を取られるわけじゃない。人生100年時代、一つの道を極める必要なんてないんです」

App Storeでダウンロードが

きるiPhoneのゲームアプリ「hinadan」は、高齢者も楽しめるゲームを作りたくて若宮がプログラミングを学んで開発した。

「プログラミンも知り合いに教えていただきました。今では無料の開発ソフトがネットで提供されていますからお金をかけずに学ぶ方法はいくらでもあります。ほかにも俳句の会に長く参加していますし、最近ではピアノも始めました。もちろんアプリを使ってね」

「70代、80代は伸び盛り」という若宮は、「人のつくった物差しで自分を測る必要はない。そもそも能力や資質に物差しを当てて測る時代ではなくなっています」と強調する。今より豊かな人生を送るためだけでなく、ただ自分が楽しいから、面白そうだからという動機で学ぶ姿勢が、ひいては自分らしく社会と接し、働き続けるための大きなエネルギーになるのかもしれない。

## 若宮正子

“役に立つとか、社会に還元できるかを気にするより、学びたいことを学ぶのが一番なんです”

81歳でアプリ「hinadan」を開発した若宮正子。定年退職後にパソコンをはじめ、独学でプログラミングを習得。「世界最高齢のアプリ開発者」としてApple社CEOのティム・クックも称賛する。

“学び直しの目標とは、これまでの働き方や生き方の「棚卸し」なんです”



(上)「ふるさとみつけ塾」を主宰する大桃綾子(左)と北村貴(右)。キャリアの現在地を確認し、それぞれが納得するキャリアデザインをサポートしていくことが、ジェンダーギャップを次の世代に持ち越さない一つのアクションだという。(下)「熱中小学校」の授業を受ける宮寺由佳。コロナを機に転職に踏み切り、現在は十勝に住みながら月に一度関東に戻る二拠点生活を送る。



ふるさとみつけ塾